

## 研究授業「保育内容－言葉」の実施報告

井上 範子\*

### Report on an Open Class : “Early Child Care Education ~ Language”

Noriko Inoue

(Abstract)

This paper reports on an open class held at the Department of Early Childhood Education during the second term in 2009, and records comments given by department members at the meeting after the class.

The lesson focused on children's written language, following on from a previous lesson on spoken language. The writer examines the process of interesting children in written language and having them realize its convenience. The paper also refers to how nursery teachers should consider this process.

Key words : an open class, Language (Content of Child care and Education)

はじめに

本稿は、「保育学科におけるFaculty Development活動の実施」(大学教育高度化推進特別経費 平成19年度教育・学習方法等改善支援経費)の一環として行われた「保育内容－言葉」の研究授業の記録である。保育学科としては、平成15年度より毎年研究授業を行ってきているが平成21年度としては2回目の後期に実施された研究授業である。

以下は、その研究授業の実施記録と授業観察者との検討会やコメントをまとめたものである。

---

\* 提出年月日2010年11月30日、高松短期大学教授

## 1、研究授業実施の日程

研究授業及び検討会は次の日程で行われた。

- (1) <研究授業> 日 時 : 2009年12月1日(火) 3校時  
場 所 : 2105・2106 講義室  
授業科目 : 保育内容一言葉  
対 象 : 保育学科 2年生(67名)  
授 業 者 : 井上範子  
参 観 者 : 保育学科教員5名、大学教員2名
- (2) <検討会> 日 時 : 2009年12月1日(火) 5校時  
場 所 : 2201 演習室  
参 加 者 : 保育学科教員7名、大学教員1名

## 2、「保育内容一言葉」の授業計画(本学シラバスより)

### (1)【授業の紹介】

この授業は、すべての実習が終えた後に始まるので、子どもにとっての言葉とはどのようなものか大体のことは実践を通して学んでいる。それだけに考えさせられる面も多々あったことと思われる。そこで、現場での体験を想起しながら、生きる力の基礎となるコミュニケーション能力を身につけるための方策を探求していく。あわせて言葉に関する基本的事項の習得や子どもとともに心豊かな言語感覚が身につくためのワークショップを試みる。

### (2)【教育目標】

言葉の獲得は、乳幼児期の発達課題の一つとして重要なものであることの再認識からスタートして、日々の保育活動の中でどのようなとらえかたやかかわりかたをすればよいかを習得する。また、子どもの言葉だけでなく自分自身の言語感覚を磨き、保育者として日常的に優しい品格のある言葉遣いができるよう努力する習慣を養う。

(3) 【成績の評価】

- 1) 言語作品またはレポートの提出
- 2) 期末試験
- 3) 授業態度と出席状況等の総合的評価

(4) 【授業計画】

- 第1回 子育てと言葉 (1)
- 第2回 同 上 (2)
- 第3回 領域「言葉」がめざしているもの
- 第4回 領域「言葉」と小学校「国語」との関係
- 第5回 言葉の獲得 (1)
- 第6回 同 上 (2)
- 第7回 言葉を育てる環境 (1)
- 第8回 同 上 (2)
- 第9回 同 上 (3)
- 第10回 同 上 (4)
- 第11回 言葉の育ちにかかわる諸問題 (1)
- 第12回 同 上 (2)
- 第13回 言葉の感覚を磨くためのワークショップ (1)
- 第14回 同 上 (2)
- 第15回 期末試験

(5) 【授業時間外の学習】

(平成21年度の場合、シラバスには記載されていなかったが、授業時には、参考文献を紹介するたびにその一部に目を通すことを指導)

(6) 【使用テキスト】

小田 豊・芦田 宏 編著『保育内容 言葉』(北大路書房、2009年)

(7) 【参考文献】

授業時に随時紹介（別紙 資料に掲載）

(8) その他

3、本時の概要

(1) 授業題目 「言葉の獲得（2）－書き言葉－」（第6回）

言葉には、「話し言葉」と「書き言葉」の2種類がある。子どもは、まず、信頼するごく親しい人との間で「話し言葉」を育んでいく。そしてその「話し言葉」の世界を拠り所として「書き言葉」という世界に船を漕ぎ出していく。

本時では、そうした子どもたちがどのように興味関心を示し、書き言葉の世界へ引き込まれていくのかを考察していく。また、引き込まれた子どもがどのような反応をするのかについても事例を紹介する。（どのような経過をたどっていくのか理解していると、子どもの状態の読み取りや受け止め方等、見通しをもって環境整備や言葉かけにも幅が出るのではないかと考えたからである。）

(2) 本時の指導目標

幼児の書き言葉は、いつごろから、どのような形で始まり、その育ちがどのように展開していくのかを概観することにより、保育者としての受け止め方を理解する。

(3) 授業内容等

授業の展開（本時の指導案は後掲）

①導入

授業の最初に、いつも前回授業終了後に提出されたカードに書かれた質問について、復習を兼ねて答えることにしている。前回は、「話し言葉」を中心に学んでいたので、質問には保育者としての言葉かけに関するものが多かった。具体的な事例を挙げて説明。

前回終了時に、本時への動機づけのために学生自身の幼児期を振り返り、文字への

興味や絵本読みの（読んでもらった経験を含めて）事前調査をしておいたものを簡単に報告（詳細は略、一部紹介すると、文字に興味を持ち始めたのは、68.5%のものが3～4歳であり、書くことに興味をもったのは、69.6%が4～5歳と回答）。

今日は文字について考えていくということを十分イメージし興味を持たせ、本時の目標をまず認識させておいた。

## ②展開

文字や言葉についての柔軟な姿勢で対処できるようにと思い、『にほんご』（福音館書店）の中の〈かく・よむ・もじ〉のところ（内容は一部資料をコピーして配布）を見て気づいたことを書いてみる。（文字と言っても平仮名50音のみをイメージしてほしくないと思ったので。（常に一方的概念にとらわれて物を見るという習慣を払しょくしたいと思っての配慮）

次に書き言葉についてテキストを黙読してアンケート結果と対比しながら考える。

文字への興味関心で読みと書きには1年の差があったが、個人差や環境を含めてとらえることに注意。また、書くことについては、鏡映文字や筆順等の未発達から来る誤りの特徴も、実際に幼児の書いた文字や文章サンプルを見せて理解へと導いた。

豊かな書き言葉の育ちには、遊びを中心とした日常生活が基盤であることを踏まえて幼児自らの欲求に応じて扱うことの大切さや、豊かな話し言葉の世界を体験する環境を考慮する等遊びの事例やその結果生まれていく場面の写真や事例を提示した。

幼稚園教育要領や保育指針での文字の取り扱いについてもここで触れておいた。

## ③まとめ

文字に興味をもった子どもの育ちの事例も紹介して、保育者としての受け止め方や環境構成の一部を紹介して考えさせた。

幼児期の文字の扱いは、文字を使いこなすことだけが目的ではなく、文字は人に何かを伝え、人と人とがつながりあえるために文字が存在し、それを感じ取れる環境を工夫し援助することが大切であることを伝えたかった。

最後に、いつものように質問・感想を記入提出で終了。

## （4）指導上の留意点・工夫

①事前に学生自身の幼少時における読み書き経験をアンケート調査することにより学習内容の動機づけとした。

- ②常に物事を広い目で見ることが願って授業を進めているので、参考資料も幅広く取り上げ紹介しながら多方面の気づきを大切にしている。今回は『にほんご』（福音館書店）を取り上げた。
- ③授業者自身の経験や現場の状況（子どもの作品や育ちの様子）エピソードを交えながら事例を紹介することにより学生の理解を助け、臨場感を持たせたいと考えている。

#### 4、学生の状況

毎時間ごとの学生の反応はおおよそ上記のとおりであるが、一般的にみて予習・復習は殆んどしていない。ほぼ義務化された提出物のまとめレポート以外の家庭学習がない。この現実をふまえて「しっかりした理論に裏付けられた保育者の養成」をするにはどうするのか。より一層課題を課し自学自習をさせるのかの疑問がわいてくる。しかし、半ば強制的に与えられた課題についてはまじめな学生が多いのである程度のもはこなしてくると思うが、今までの経験上、自らの意思で学んだもの以外はあまり身につけていない。「見たこと、聞いたことは忘れるが、やったことは覚えている」という事実。

実際、授業の感想の中に、毎回のように出てくるのが「実習中にそのような子どもの反応を見たことを思い出しました」と書いている。実習（体験）は強烈な学びである。

「講義で学んだことを実習中に思い返し、実習で得たものを講義で思い出す」この連鎖をうまく学生の自発的な学びにつなげられたら今より確かな実践力として自信が持てるのではないか。

実技習得には熱心になるが、その土台となる基本理念についての認識や理解力が不足している。後期は、短大での学びの仕上げになるので、そこの気づきに力を注いでもらいたいのである。

授業は座席指定で実施しているため私語する人はほとんどいないようであるが、食後の授業であるため講義中心になると居眠り学生が出てくる。板書の文字を書き写す状況になると真剣に書きとる。話を聞いてまとめてノートをとるというのは苦手ようである。できるだけ自分で聞きながらまとめられるようになってもらいたいと思い、レジュメの空欄に自分で要点を書きこめるようにしているが、板書しないで話だけになると書かないか、寝るかになる者がある。

## 5、授業に対する参観者の評価

### (1) 授業を積極的に評価できる点

#### ① 教育内容

- ・長年の現場経験を基に、現在の学生の状況を十分に把握した内容である。まさに建学の精神「理論と実践との接点を開拓する」を体現する内容である。
- ・文字に興味を示すことから始まって、自分で書こうとする、そしてその言葉が豊かに育っていくまでが非常に明確に示されていた。「読むこと、書くこと」には遊びの中で興味をもち、その興味は自然に広がっていくとは言え、周囲の大人のはたらきかけが大切であることへの理解ができる授業だった。また、言葉は人を癒し、一方では傷つけることや、書き言葉の「残る」という特徴も学生の心に印象付けられた。
- ・授業内容を補完するさまざまなエピソード（具体例）が学生の授業理解促進につながっていると思われる。
- ・事前アンケートの実施が、学生自身のことと授業内容とがリンクされて、自分のことと、就職後の保育を考えるきっかけになると思った。
- ・幼児の書き言葉の始まりや育ちについて、これから現場に出ようとする学生にとって、興味や関心の持てる内容である。また、新保育指針や幼稚園教育要領にもふれ、学生には授業内容の重要性がより深く認識できたように思う。
- ・幼児の「書く」という表現の始まり、展開、発展とその実例が豊富で、わかりやすく、要点の強調が学習の助けになっている。
- ・授業内容の構成が、表面的に暗記してしまいがちな保育指針や教育要領の意味について深く理解できるようになっていた。

#### ② 授業方法

- ・学生たちのアンケート結果から、子どもからの手紙や子どもが作った絵本など、豊かな資料の提示によって学生が集中していた。さらに、資料に関する先生の解説から、子どもたちの言葉をどのように受け止めたらいいいのかといった本時の目標に迫ることができた。
- ・テキストの黙読、ワークシートにまとめる時間は、板書を写す受け身の学習ではなく、主体的に学ぶ習慣形成に効果的な方法だと思える。

- ・最初に本時の指導目標の確認があり、学生の心構えや発問により動機づけを行っている。資料や話題の豊富さが興味の持続につながり、さらに実習体験を想起させることで理解を促し、絶えず、学生とのやりとりを意識して進めていることが評価できる。
- ・アンケートから入ることで、言葉の発達の問題が学生自身により身近な問題として受け入れられたように思う。また、保育現場で出会った文章、体験、保育者の思いを語ることで、学生の学習内容に対する意識が高まっていたと思う。
- ・受講生を飽きさせない教材提示や資料の準備工夫に熱意を感じた。
- ・後方座席の学生のための大型スクリーンの利用、静穏な学習環境を構成する座席指定配置、常に保育現場を意識した教示がなされており、この時期（2年後期）にふさわしい方法と思われる。
- ・10週間の実習を終えた授業で、授業者の体験を交えているため追体験をしているようで親しみやすい。
- ・やさしく丁寧な口調は非常に理解しやすく、最後まで集中して受講できていた点が素晴らしい。

### ③ その他

- ・後ろから見る限り、学生全員が興味深く授業を受けているように見えた。いい意味での緊張感はどうしたら持続できるのか自分の授業に生かしたい。
- ・参考文献や参考図書の紹介など、授業時間外における学習指導を始め、学生のことを思った工夫と学生に対するメッセージが読み取れ、大いに刺激を受けた。
- ・教科書の選定、人間としてのエチケットに対する事前通知がなされており、授業担当者の教育的配慮が見られた。
- ・テンポもよく、メリハリの感じられる授業で、「思った」だけではなく実行しなければ何もならないという生活指導も併せて行われていた。
- ・先生の語り口（語尾の調子）がとても美しく、上品で学生たちにも気付いてほしい。

## (2) 授業の改善にかかわる点

### ① 教育内容

- ・出席カードの感想欄に『にほんご』のことだけでなく、学生たちが子どもたちの

作品を見ての感想を表現する機会があってもよかったのではないか。

- ・内容が多くて消化しきれないものもいたのではないか。
- ・学生の状況（予習・復習をこなしていない）からして、授業内容を厳選することの難しさを改めて感じた。
- ・レジュメを作成した時の項目間のつながりを持たせることの難しさを感じる。
- ・改善にかかわる点というより質問ですが、本時のテキスト部分においても解説が試みられていますが、「書き言葉・文字」と「話し言葉」との相関関係という点、あるいは「言語記号」が「音声」と「概念（イメージすることがら）」で創出される概念化形成の在り様といった点などは、私個人的には非常に興味深く拝聴させていただきました。しかし、どこまで学生たちに説明するかは極めて難しく、工夫が必要とされるところですがいかがお考えでしょう。

（確かに学生の理解に十分耐えられる説明は難しいと思います。それだけでなくも内容過多ぎみで、内容精選に苦勞していますので今のところは消化不良のままを気にしているのが現状です。）

## ② 授業方法

- ・興味のある学生（学習意欲の高い学生）への配慮がなさえていると拝察しましたが、逆に多くの授業においてアポリアとなっている「意欲の低い学生」に対する配慮（工夫・指導のポイント）についてご指導をいただきたい。  
（授業内容の中で、すべての学生に理解してもらいたいものと、興味があればさらに深く追求するとしたらこのような方法もあるということを示し、ものによれば意欲的な学生の学びの支援をしていきたいと考えています。）
- ・子どもの作品紹介について、作品の順番などに発達のプロセスを踏襲するなどするとより納得的な理解が図れたのではないかと感じた。また、授業の途中で学生に対するメッセージや想いが述べられていたが、学生がどこまでキャッチできているか不安を感じた。
- ・発問・回答、説明、テキスト読み、事例紹介、OHCによる実物提示、参考資料明示、多様な方法を用いたが忙しそうという印象。途中で学生がどこどこ？と探す姿が見られた。
- ・授業開始から20分程度、絵本『ことばはひろがる』がOHCに提示されていたが、取り扱われたのは、2、3分程度だったのでもったいないと感じた。授業の

最後に『にほんご』の感想をかくのであれば、むしろこの本を長く示したほうが良かったように感じた。

③ その他

- ・授業終了を告げてから出席カードをまだ書いている学生がいるのに、早く書き終わったものから退出したので、真剣に書いている学生が気の毒だった。落ち着いて書ける時間の工夫がほしい。テキストを忘れている学生の態度に問題を感じた。
- ・話の中のしゃれや皮肉は、私には面白かったが学生にはどこまで通じたのかな。教室の両サイドの画面が小さいので、人数の多い授業では要注意である。
- ・教科書の扱い方について、購入してもらった以上はもっと使わなければならないと思う反面、使用しにくいところもあり検討すべき点があり気にしている。

(3) 授業全体の感想

- ・先生の思いが強く伝わってきて、思わず時がたつのを忘れて聞き入ってしまいました。同時に20年前の自分の子育て体験を投影して、なつかしく、反省しきりでした。母親としての働きかけと、これから学生が体験する保育職に就いた時の働きかけは、思い入れや立場のわずかな違いがある部分で大変重要でありながら難しいと思いました。
- ・先生の学生に何とか理解してもらいたいという思いがひしひしと伝わる授業で、長年の経験に裏打ちされた内容で少しでも近づきたいと思った。
- ・大変興味深く拝見し勉強させていただきました。学生の学力の問題もさることながら、マナー、エチケットに関する意識の涵養も看過できない問題とされます。今回の授業を新たな契機として、学科の授業向上を図る方策を提起していきたいと思います。
- ・同室にいた時から感じていましたが、毎年授業を作りかえられ、先生の苦労は計り知れないものがあると思います。変わる学生の姿に対応すべき授業を考えていこうと思いました。
- ・授業後に他の先生方と話をする中で、先生の経験に裏打ちされた指導内容の豊かさに圧倒される思いでした。学生の目線で、現場の目線で指導をするには、私自身ももっともっと現場を勉強しなければ・・・と、改めて反省させられました。本

学の教員にとって、良い刺激、勉強になりました。

- ・授業計画もよく準備されているし、これまでの保育実践の事例が豊富で話題に事欠かない点、羨ましい限りでした。60名を超える学生をよく掌握していた。
- ・とても丁寧な授業で、これこそ保育学科の授業であると感じ、授業の終了を告げられた後、思わず拍手をしてしまいました。学生たちへの配慮だけでなく、参観している教員への心配りもされていて、学生たちに気付いてほしいと思いました。学生たちの現状と興味関心を踏まえて、授業が工夫されていて、授業内容についての学生の理解が深まるように構成されていました。さらに、“子どもと一緒に生活は楽しい！”という保育者として重要な心構えを、メッセージとしてとても強く感じることができました。保育の心を学んだ思いでした。

## 6、指導後の振り返り

### (1) 授業者の反省

いつものことながら、学生たちに伝えたい思いや内容が多すぎて十分伝えきれないままに時間が過ぎてあせり、早口になったり、説明不足になったりしてしまった。

内容の精選を自分の目標にしているにも関わらず詰め甘さを反省している。(言葉にしなくても、絵や写真、資料提示で乗り切ろうとしたがその手順もまずかった。

## まとめ—授業改善の課題—

### ① 授業内容の精選

「何を、どれだけ、どこまで、どのように」と思い続けて何年もたっているのに、いまだ改善されていない自分を反省している。

あれもこれも伝えたいことが山ほどある上に、子どもたちとの楽しい生活、子どもの感性の素晴らしさ、例をあげればきりがなくらいで、つい欲張ってしまう。そして、学生には消化しきれないくらいのもをこれもあれもと提示続けている自分に気づいては落ち込み反省している。

人生終えるまで言葉は使い続けなければならない。その基礎作りの大切な部分を受け持っていると思うとつい欲張ってしまう。もっと冷静に整理分析していくことを最大の課題としたい。

### ② 自ら学ぼう、学びたいと思い実践できる学生を育てる

幼児の教育と大学生の教育を同時進行で歩んできた経験から、どんなに良い教師や設備を用意したとしても、本人にその気がなければ中身は育たないということを思い知らされてきた。このことは近年の切実なる課題としている。

そのために、本学では設立当初から早い機会に長期にわたり子どもたちと直接触れ合うことを特色とし、大切にしてきた。学生自身もそのことを大変楽しみに精進している。体を動かせることはあまり厭わないがしっかりした理論を身につけて子どもとともに歩んでもらいたいと施策を講じてみるがまだまだ。見学の精神の一つである「理論と実践の接点を開拓する大学」と銘打っていることの実践に研究的努力が望まれている。一人一人の学生が心底、子どもとかかわる楽しさとその使命感に気付き努力しようとする心が育つ魅力的な授業づくりに学科をあげて英知を結集し構築することも一つの課題である。

未来を託す子どもたちのために！

平成21年度 後期 保育学科(公開) 研究授業 資料

1、実施の概要

＜研究授業＞	日 時	: 2009年12月1日(火) 3校時
	場 所	: 2号館 2105・2106 講義室
	授業科目	: 保育内容一言葉
	対象・学年	: 保育学科 2年生
	授業担当者	: 井上範子
＜検討会＞	日 時	: 2009年12月1日(火) 5校時
	場 所	: 2号館 2階 2201 演習室

2、「保育内容一言葉」の講義概要(シラバスより)

【授業の紹介】 この授業は、すべての実習が終了後に始まるので、子どもにとっての言葉とはどのようなものか大方のことは実践を通して学んでいる。それだけに考えさせられる面も多々あったと思われる。そこで、現場での体験を想起しながら、生きる力の基礎となるコミュニケーション能力を身につけるための方策を探求していきます。あわせて言葉に関する基本的事項の習得や子どもとともに心豊かな言語感覚が身につくためのワークショップを試みたい。

【教育目標】 言葉の獲得は、乳幼児期の発達課題の一つとして重要なものであることの再認識からスターとして、日々の保育活動の中でどのようなとらえかたやかかわりかたをすればよいかを習得する。また、子どもの言葉だけでなく自分自身の言語感覚を磨き、保育者として日常的に優しい品格のある言葉遣いができるよう努力する習慣を養う。

【成績の評価】 1)言語作品またはレポート(子どもの言葉の採集)の提出  
2)期末試験  
3)授業態度と出席状況等の総合的評価

【授業計画】	10:20	第1回	子育てと言葉(1)
	10:27	第2回	同上(2)
	11:10	第3回	領域「言葉」がめざしているもの
	11:17	第4回	領域「言葉」と小学校「国語」との関係
	11:24	第5回	言葉の獲得(1)
	12:01	第6回	同上(2)
	12:08	第7回	言葉を育てる環境(1)
	12:15	第8回	同上(2)
	12:22	第9回	同上(3)
	1:12	第10回	同上(4)
	1:19	第11回	言葉の育ちにかかわる諸問題(1)
	1:26	第12回	同上(2)
	1:30	第13回	言葉の感覚を磨くためのワークショップ(1)
	2:2	第14回	同上(2)
	未定	第15回	期末試験

【使用テキスト】 小田 豊・芦田 宏 編著『保育内容 言葉』(北大路書房、2009年)

【参考文献・参考資料】今回までに紹介したのは以下の通り。

- 第2回 1) 正高 信男『0歳児がことばを獲得するとき』—行動学からのアプローチ—  
中公新書 2000.8  
2) 大森 修監修、松野孝雄『「読解力」授業づくりへの挑戦』明治図書  
3) 和田 秀樹『国語力をつける勉強法』東京書籍  
\*ブックスタート 資料
- 第3回 4) アーノルド・ゲゼル著、生月雅子訳『狼にそだてられた子』家政教育社  
5) ロジャー・シャタック著、生月雅子訳『アヴェロンの野生児—禁じられた  
実験—』家政教育社  
6) 谷川 俊太郎・詩 和田 誠・絵『いちねんせい』小学館  
7) はせみつこ編 / 飯野和好・絵 『しゃべる詩あそぶ詩きこえる詩』富山房  
8) 水内喜久雄・関 洋子編著『保育園・幼稚園でよみたい詩12ヵ月』民衆社  
9) 金子みすず / 選者 矢崎節夫『金子みすず豆文庫』JULA出版局
- 第4回 10) ハンネレ・フオヴィ/メルヴィ・バレ/マルック・トリネン著クリスティーナ・  
ロウヒ イラスト 北川達夫&フィンランド・メソッド普及会 訳・編  
フィンランド読解メソッド『4つの基本が学べるフィンランド読解教科書』  
株式会社 経済界  
11) 滝沢 武久『話し合い、伝え合う —子どものコミュニケーション活動』金子書房  
12) 松居 直 『松居直のすすめる50の絵本—大人のための絵本入門』
- 第5回 13) B.バックレイ、丸野俊一監訳『0歳~5歳児までのコミュニケーションスキルの  
発達と診断』北大路書房 2006.4  
14) きむらゆういち『きむらゆういち式 絵本の読み方』宝島社 2004.7  
15) 松谷みよ子 文・瀬川康男 画 『松谷みよ子あかちゃんの本 いらない  
ない ばあ』童心社 1967.4  
16) サン=テグジュペリ 原作 奥本大三郎 文 『星の王子さま』絵本版  
白泉社 2007.10
- 第6回 17) 国立国語研究所 『幼児の読み書き能力』東京書籍 昭和47年6月  
18) 三神廣子『本が好きな子に育つために—文字の習得と読書への準備』  
萌文書林 2003.10  
19) 『教育科学 国語教育』—「聞く力」を鍛える授業アイデア— No.716 2009  
12 明治図書  
20) 編集委員 安野光雅・大岡 信・谷川俊太郎・松居 直『にほんご』福音館  
書店 1979  
21) 鶴見俊輔：文 佐々木マキ：絵 『言葉はひろがる』福音館書店 1988.3

\* 本講義に至るまでの状況

(1) この授業を進めるにあたっての授業者の思い

この授業は、幼稚園教諭免許状、保育士資格取得のための必修科目であるため受講生はそれなりにまじめに受講している。一方、すべての実習が終えた後に始まる授業であるため、ややもすると緊張感が緩みそうになるのは致し方のない時期であることは承知している。しかし、卒業後のことを考えると、実習時のような甘さでは通用しない現場が待ち受けていることの厳しさを伝え、それに対しての自覚と認識をもってもらいたいと思っている。

現場に出ても困らない、それでいて子どもをしっかり受け止め、子どもの中に育ちつつあるものを見逃さずに育んでいけるような保育者養成を目指したい。子どもから、保護者から、同僚から本人に関わるあらゆる人から頼られ、信頼され、仲間として受け入れてもらえる人材に育ってほしいと必死の思いで毎時間授業を進めている。

保育者養成に関わるすべての人が同じ思いであると認識しているが、現場を預かりながら授業を進めるものとして簡単に妥協できない思いが日常的に押し寄せてきている。

言葉を交わさずには済まされない仕事であることを考えたとき、言葉で励まされ、言葉で傷つき、言葉で癒され、言葉で希望がわき、言葉で幸せ気分を味わえたりする言葉の持つ力を把握してもらいたい。そしてその実践力をつけるため自分磨きに自主的努力を惜しまないような人に育ってほしいと願い試みている。

「保育内容一言葉」という授業の中でこの思いを伝えようとしても自分自身の表現力の稚拙さから伝わらないもどかしさに辟易している。そうしたなかで本を紹介したり、体験から来る思いを話したりと格闘を続けているが、反応は今一つの感がある。十分な対策も思いつかないまま今日に至っている。

今回の公開授業をお引き受けしたのは、本日の参観者おひとりおひとりから適切なご助言を賜りたく、そしてまた、子どもたちから待ち望まれる保育者、地域社会からは信

頼まれ期待される保育者が育ちますよう祈りを込めて拙い思いをお届けします。

## (2) これまでの授業の流れと学生の反応

### 第1回 (10/20) オリエンテーション、子育てと言葉(1)

- \*本時のねらい {保育内容—言葉について学ぶにあたって、そのねらいや心構えをしっかりと把握し、子育ての中の言葉の持つ意味を理解する}  
授業者の意図や法的規制の保育の目標、領域「言葉」のねらい、子育ての中の言葉の持つ意味等、簡単なワークショップを交えてスタート。
- \*学生の反応—毎時提出してもらった出席カードへの記入コメントから、言葉の持つ意味、言葉育ての重要性の一端は理解できたようである。

### 第2回 (10/27) 子育てと言葉(2)

- \*本時のねらい {人間にとって言葉とは、子どもにかかわる者の言葉とは、社会が子どもの言葉を育てるシステムについて考える}  
言葉を育てるコミュニケーションと言葉について、自分自身の言語力の不足であるとか、子どもとかかわる人、モノ、環境の在り方考え方、子どもと言葉との関係は把握できたと思う。
- \*学生の反応—一人の発達と人格に言葉の果たす役割の大きさに気づいた。これからいろいろな形での読書や、活字とも親しめるよう努力したいとの感想もあった。

### 第3回 (11/10) 領域「言葉」が目指しているもの

- \*本時のねらい {保育所保育指針や幼稚園教育要領に示された、言葉の獲得に関する領域「言葉」が目指しているものを理解し、保育・教育計画の立案評価のための視点を得る}  
学校教育法における幼稚園教育の目標の中の言葉に関するもの、保育指針と教育要領の言葉の領域についてパワーポイント方式を取り入れながら並列し比較検討をしてみた。両者の共通点、保育指針独自のものなどはよく理解できたようだが、立案評価のための視点を得るところまでは届かなかった。言語感覚を育てる一つの方法としていくつかの「詩」を紹介したのが以外と好評であった。
- \*学生の反応—子どもの言語感覚を育てるためには、保育者の話す言葉は大切であり、

様々な環境や視覚的なものから自分の経験したことすべてが言語・言葉に発展するということが分かった。と書いている。また、「詩」についての反響は大きく、自分の好きな詩の紹介や、これから様々のものを探してみたいというのが多かった。

#### 第4回 (11/17) 領域「言葉」と小学校「国語科」との関係

\*本時ねらい {領域「言葉」と小学校「国語科」との関係を理解する}

保育所での保育、幼稚園教育から小学校教育へは、連続的な視点で見なければならぬ。幼・保の領域「言葉」では、生活経験に即した基礎的な言語活動を心豊かに行うことを重視するのに対して、小学校の「国語科」では、日本語能力の育成が前面に出てくるところは理解できたように思う。また、フィンランドの教科書を紹介しながら、自分で絵を読み取り言葉にしていくという方式について考えてもらったが、答えは一つではないというのが少々不安のようであった。各自書いてもらったがまずまずといった結果だった。

\*学生の反応—教科書にあった5歳児のつぶやきに対して、子どもの思考の特徴を十分理解していない発言もみられたが、大部分は子どもの発言をほほえましくまた、そうしたものを見逃さずに受け止められるよう心掛けたいという意図のほうが多かった。

#### 第5回 (11/24) 言葉の獲得 (1)

\*本時のねらい {子どもが言葉を獲得していく道筋を理解することによって、目の前の子どもがどこにいて(発達上の)、何が必要か判断する根拠を探る}

乳幼児が言葉を獲得していく道筋について、言葉が出る前、音声刺激に対する反応を受け止め、心地よい信頼関係の中での音声によるやり取りが言葉を生むという話し言葉以前のところは、保育士の場合母親指導もしなければならないこともあるので丁寧に説明した。幼児期の言葉の獲得のところは、去年の乳児保育でもある程度ふれられていたので、グループ内でテキストをまとめる役割分担とするワークショップ方式にした。

\*学生の反応—言葉の獲得には、子ども自ら言葉の世界を切り開こうとする力や、かわりを持つと心する心の基盤が必要であることは理解できた。また、自分たちで直接テキストを読みまとめをするという行為はよく頭に入る。今まで先生が事前にテキストに目を通しなさいといわれる意味を実感した。

本時の授業内容

(1) 講義題目 第6回 言葉の獲得(2) - 書き言葉

(2) 本時の指導目標

幼児の書き言葉は、いつ頃からどのような形で始まり、その育ちがどのように展開していくのかを概観することにより、保育者としての受け止め方を理解する。

(3) 授業の展開(指導計画)

時間	講義内容・学習活動	指導上の留意点
13:00	○前回の復習 出席カードのコメントから ○文字興味のアンケート調査から  ○本時の目標についての確認	・読み書きの興味関心のみを取り上げる  ・学びのポイントをおさえておく。
13:12	○「にほんご」(福音館書店)の中の〈かく・よむ・もじ〉ののところを見る。 ・気が付いたことを書いてみる。	・文字や言葉について柔軟な姿勢で読み取るベース作りとしてとりあげたい。
13:20	○書き言葉とは ○文字への興味・関心のところを黙読する。	・アンケート結果と対比しながら考えてみる。
13:30	○読むことについて  ○書くことについて	・環境を含めた個人差を意識しておくようにする。  ・読みと書きの間に1年の差、鏡映文字や筆順などの未発達からくる誤りの特徴も理解しておく。
13:45	○豊かな書き言葉の育ちとは ・日常生活の中での文字 ・保育指針や教育要領での文字の扱い ○書き言葉の育つ場面	・幼児期の文字の扱いは、遊びを中心とする生活が基盤であることを踏まえて、あくまでも幼児自らの欲求に応じて扱うように。楽しい豊かな話し言葉の世界を体験して、表現の世界が自然に広がるような配慮を大切に。幼児自ら切り開こうとする状況を見守り応えていくように。
14:00	○文字に興味を持った子の発展事例 ・この事例から保育者としての受け止め方を考える。 ○参考資料明示	・興味を持てば子どもは際限なく伸びようとするものを持っている場合があることの事例としての紹介である。
14:25	○出席カード記入	

(4) 準備物

- \*【参考文献・参考資料】の欄に書名等は第6回のところに記載済み
- \*雑誌『言語生活』（通号 234）{1971.03.00} P38-44
- \*鶴見俊輔:文 佐々木マキ:絵 『言葉はひろがる』福音館書店 1988.3
- \*子どもたちの作品や手紙

(5) 指導上の課題事項

- \*授業形式に見合った授業の進め方  
「演習」形式の授業であるにもかかわらず、卒業までに伝えておきたいことが多く、どうしても講義形式に陥りがちになる。学生とともに積み上げていく授業をやりたいが、67名という人数では中途半端になってしまう。
- \*実習経験を生かせる課題からの学び  
10週間の実習を終えた学生にはそれなりの体験もあるのだから、それらを生かしながら自発的に学び修めたいと思えるような課題の提示や仕組みの工夫が必要である。
- \*学生の言語能力を磨くための方策  
子どもの言葉を取り上げる一方で、学生自身の「言語力」・「言語感覚」を磨きたいと思いつながらも具体的な方策が不十分である。この点に関しては、この授業だけでどうにかできるものではないが、学生自身の自覚を促す刺激だけでも出し続けられたら少しは改善できるのではないかと。

7、今後の予定

- \*前掲のシラバス紹介の通り  
「言葉を育てる環境」(第7. 8.9. 10回)－保育者が環境をどうとらえ、どのように配慮していくのか、いろいろな角度から丁寧に進めたい。
- 「言葉の育ちにかかわる問題」(第 11.12 回)－障害を持つ子ども、日本語を母語としない子ども、他国で生活してきた子ども、多文化・多言語、国際理解等に触れる
- 「言葉の感覚を磨くためのワークショップ」(第13.14回)－お互いに「聞く、話す、話し合う、まとめる、表現するなど」グループごとに課題設定して議論したり、発表したりして、自らの言語感覚を磨こうとする気持ちを育てたい。  
お互いにいろいろな作品(詩、文学作品、童話等)を紹介し合う。

以 上

\*拙い授業にお付き合いいただきましてありがとうございました。忌憚のないご意見を賜りたく、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願ひいたします。



保育内容一言葉一⑥

(2009.12.1)

### 3 節 書 き 言 葉

言葉には、「話し言葉」と「書き言葉」(すなわち文字)の2種類がある。子どもは、まず信頼するごく親しい人との間で「話し言葉」を育んでいく。そしてその「話し言葉」の世界を拠り所として、「書き言葉」という世界に船を漕ぎ出していく。

本時では、そうした子どもたちがどのように興味・関心を示し、書き言葉の世界へ引き込まれていくのか考察していくことにする。

本 時 幼児の書き言葉はいつごろからどのような形で始まり、その育ちがどのように展開していくのかを概観することにより保育者としての受け止め方を理解する。

~~~~~  
1、「にほんご」(福音館書店)より  
　　<かく・よむ・もじ>を見る

#### 2、一書き言葉のはじまり

##### (1) 文字への興味・関心

- ・いつ頃から
  
- ・どのような形で
  
- ・一般的には
  
- ・保育所保育指針では

(2) 読むこと

- ・一般に、読むことは、書くことより先に進む
- ・読み書きができるようになるためにはどのような発達が必要か

・いつ頃からどのようなかたちで、

(3) 書くこと

- ・いつ頃からどのように

2、一豊かな書き言葉の育ち

(1) 日常生活の中での文字

(2) 豊かな書き言葉の育ち

3、一あるきっかけから文字に興味を持ったH児の育ちについて（事例）

以下の資料 参照

- ・国立国語研究所『幼児の読み書き能力』東京書籍 1972年
- ・雑誌『言語生活』通号234 筑摩書房 1971年

Na33とともに特定幼児群で最も多くの文字を読み、かつ、その大部分をまた書くことができる幼児はNa34であった。調査者の記録によると、Na34を被調査児に取り上げた理由として、「本をよく読んでいるが、そのつど、母親がよく指導しているのではないかと思われたので、『親が教える子ども』として選んだ」とある。そこで、読書および母親の働きかけかたに注目してみることにする。

\* Na34の幼稚園時代および小学校時代の読み書き能力の発達の様相は、調査員 井上範子によって次のレポートに詳細に記述されている。井上範子：「読み書き優秀なH児はどんな小学生に成長したか」言語生活 234号。38-44ページ、1971年。茶房書房

2-4-7表 Na34の読み書き能力 H、H屋 168字中

| 調査月 | 能力 |    | 水準 |    | ひらがな |    | かたかな |     | 漢字 |    | アルファベット |    | 数字  |     | 計  |    |
|-----|----|----|----|----|------|----|------|-----|----|----|---------|----|-----|-----|----|----|
|     | 読み | 書き | 読み | 書き | 読み   | 書き | 読み   | 書き  | 読み | 書き | 読み      | 書き | 読み  | 書き  | 読み | 書き |
| 10月 | H  | Z  | 71 | 71 | 71   | 71 | 109  | 55  | 25 | 22 | 10      | 10 | 286 | 229 |    |    |
| 12月 | H  | Z  | 71 | 71 | 71   | 71 | 142  | 116 | 26 | 24 | 10      | 10 | 320 | 292 |    |    |
| 2月  | H  | Z  | 71 | 71 | 71   | 70 | 160  | 146 | 26 | 26 | 10      | 10 | 338 | 323 |    |    |

「今まではひらがなだけは正しくさせておこうと思って注意したが、あとは尋ねられたときか、よほどのでたためを発見したとき以外は教えてない」

ということだったと記録にとどめている。この点、Na34自身も「1字1字教えてもらったのではなく、自分で書いているうちにしぜんになおったり、おかしいと思う字はおかあさんに聞いてみたりしてなおってきた」と述べており、母親の上述のこととは合致する。

さて、面接調査の一部の結果(12月)をみると、

方……テレビを見ていておかあさんに聞いた。

立……本に出てきて、ふりがながふってあった。

夕……夕日の「夕」は友だちの家で本を見て、そのふりがなを見て覚えた。

門……本で見た。

分……地図を見て「大分県」というのを教えてもらった。そのとき「分」の読み替えを聞いて教えてもらった。

林……本の表紙にあったのを見て聞いた。

のように、本が圧倒的に多く、33字の新しく習得した文字のうち、19字までが本からと答えている。

もっとも、親の指導の完全主義だけで説明しきることではできないのであって、Na34の場合には、本人自身が百科辞典や地図に興味を持ち、そして漢字を書きながら、それが表出し、創造する文字の世界を限りなく広げていっていることも、文字の定着過程として注目しなくてはならない。「一字漢字を書くごとに新しい空想が生まれ、その空想が新しい漢字を引き出すようである。」(調査者の報告) 次の例は2月1日、文字の自由書きのときに書いたものである。

Na34の自由書き(昭和43年2月1日)

Na34自身が、漢字を書いて、漢字が世界を創造する楽しみを知らなければ、これほどまでの読み書き能力の進歩は約束されなかったにちがいない。

3月2日アメリカ陸軍軍人  
ベトナム戦争回止め  
オランダでボジエニ  
38号を佐力している  
今でも佐力をつげられ  
ているより

ソ連は身をたくさん  
佐力している国た  
より

2-4-8表 Na34が自由書きに使用した漢字数

| 調査月 | 漢字数  | 備考                 |
|-----|------|--------------------|
| 10月 | 39字  | 数字・ひらがな・かたかななどが中心。 |
| 11月 | 116字 | 漢字を書くことに興味を示す。     |
| 12月 | 171字 | 百科辞典や図鑑に興味を示す。     |
| 1月  | 186字 | お話を作って書いた。         |
| 2月  | 248字 | 宇宙ものなど種類がふえた。      |

『読み書きに興味を持った子の育ち』事例

で知っているものから順に書き、それで行きつたものと発音や意味の同じものをさがして知って行くだけ次々進捗して書いていくと聞いたように、文字の量・範囲が広がると同時に書き方の要領もよくなっていた。定期調査に使用している漢字数は一六八文字であるが、最後の二月調査では二四八文字を、提示している文字よりはるかに多い文字を書いた。そして書いた文字の内容をみると「戦争もの」「古代もの」「人名」など興味をもっているもので、絵本や図鑑などにでてくるものはむかしい文字でも書いていた。例えば「鹿・獣・鑑・鑑・藤・館」などのような文字である。

文字の自由書き調査(毎月実施)  
最初ひらがな、かたかなが主であったのが漢字に興味をもち始めてからは漢字を中心に書くようになった。最後の二月



このように幼稚園時代は特定幼児として選ばれ定期的に調査をするようになってから以前より一段と漢字に対する興味をもったようである。病院へ行って「小児科」と書いてあるのを見て「児」の読み方を母にきいたり、本屋へ行って「書店」というのを憶えたり、家に来た年賀状の中で「掘家」を「掘池」と書いた間違え手紙を見つけて「池」を憶えるなど、やうやう、生活そのものの中からどんどん

以下は、雑誌『言語生活』(通号234) 筑摩書房 1971.3 より



このように幼稚園時代は特定幼児として選ばれ定期的に調査をするようになってから以前より一段と漢字に対する興味をもったようである。病院へ行って「小児科」と書いてあるのを見て「児」の読み方を母にきいたり、本屋へ行って「書店」というのを憶えたり、家に来た年賀状の中で「掘家」を「掘池」と書いた間違え手紙を見つけて「池」を憶えるなど、やうやう、生活そのものの中からどんどん

書きかきかき(に)面白いものがあつたので紹介しておきたい。例えば「自動車」の性能「病院医師団の一覽表」「地下室設計図」のよう

なもので、これらはすべて空想的なものである。何かを見て書くのではなく、自分で考えたものを、知っている範囲のことばを使って書くのである。したがって「あて字」が多いのが特徴である。しかしこのあて字もすべて発音からくるものを使用し、表音文字として受けとめられているものが多い。「戦争を回止した」とか「国で正(田防省)とか「国道管理長官」「大長室(隊)」「札(ぞう)室(待)」「上水(じょう)等」など面白いものが沢山みられた。

本物持て、字の大きさばかり動く、道があつたといふと、絵日記を書いていたのもうた(今が幼稚園にあつたとき)

H児のその後  
まず、H児が三年生になつてきている現在どれくらいの漢字を読み書きできるかということ調べてみることにした。

調査期間 昭和四十六年一月十日～十五日。  
調査方法 個人面接法により休日または放課後幼稚園に来てもらつて実施。  
調査内容 小学校一年用から六年用までの漢字と六年用に追加する漢字を合わせて九六六文字を教科書からの新出漢字表より抜き出して一字ずつ提示(教科書は昭和四十四年 東京書籍発行のものを使用した)。

漢字の読み書き調査 (S.46.1 調査)

| 学年     | 調査した漢字の数 | 読めた文字数    | 書けた文字数    |
|--------|----------|-----------|-----------|
| 1      | 48       | 48(100%)  | 48(100%)  |
| 2      | 107      | 107(100%) | 106(99%)  |
| 3      | 173      | 173(100%) | 173(100%) |
| 4      | 202      | 198(98%)  | 134(68%)  |
| 5      | 184      | 171(97%)  | 78(46%)   |
| 6      | 138      | 109(79%)  | 32(23%)   |
| 6年用に追加 | 114      | 103(90%)  | 43(38%)   |
| 計      | 966      | 909(94%)  | 614(64%)  |

